

入試広報としての大学説明会の現状

三瀬敬治、傳野隆一

札幌医科大学医療人育成センター入学者選抜企画研究部門

Presentation Meeting of Sapporo Medical University for High School Students and Examination Candidates

Keiji Mise, Ryuichi Denno

Department of Admission, Medical Education Center, Sapporo Medical University

入試広報としての、高校生や受験生に対する大学説明会は、年々その参加数、対象となる受験志望者数が増加している。大学説明会は様々な場所や形式で行われ、受験志望者から寄せられる質問には、いくつかのパターンが見られる。大学説明会に参加する教職員が誰であっても本学の全体像を伝えられるようにするよう取組みが必要である。大学説明会のような入試広報活動は、一朝一夕で効果が現れるものではないが、少子化が進みつつある現代の日本において、医療を目指す学生の掘り起こしという意味でも、地道な展開が必要と考える。

1 はじめに

少子化が問題視され、大学全入時代とも言われる現代日本の大学において、質の良い適性のある学生の確保は最重要課題である。このために積極的な入試広報活動により、大学の魅力をアピールすることは不可欠となっている。入試広報活動には、大学のホームページの充実、オープンキャンパスの実施など様々な手段が用いられるが、受験生一人ひとりに接し、個別の疑問に対応できる学校訪問や進学相談会は、受験生にとっても重要な役割を示す。

本学医学部では平成13年度から、希望が寄せられた高校に直接訪問しての説明会が始まった¹⁾。これは平成9年度から始まった推薦入試制度の定員が、平成14年度入試より10人から20人に増加しことを契機に、入試制度の説明を中心にしたものであった。この際、高校からの要請があり、翌平成14年度からは保健医療学部でも高校訪問が始まり、また同年から予備校からの要請にも対応することとなった。以降、本学は各種の大学説明会への参加を積極的に進めてきている。平成20年度には医療人育成センターが発足し、同時にその一部門とし入学者選抜企画研究部門が設けられた。これによって本部門が受験生からの訪問等の要請に対応できる体制づくりとなった。

本報告では、医療人育成センター入学者選抜企画研

究部門発足前後の大学説明会への対応状況をまとめ、今後のより効果的な大学説明会への参加について考察する。

2 大学説明会の分類と特徴

大学説明会は、参加する受験志望者の範囲、参加する大学の範囲によって性格が異なる。まず参加する受験志望者が特定の高校、すなわち主催した高校に限定される場合と、開催される地域から広く集まってくる場合がある。また複数の大学が集まって相談会を行う場合と、個別の大学が行う場合がある。主催者によって相談会、ガイダンスなど様々な名称が使われているが、本報告では混乱を避けるため、便宜的に以下の通りに用語を定義する。

- ① **学部説明会**：対象が複数の高校の受験志望者、進路指導者で、本学が独自に開催するもの
- ② **高校訪問**：単一の高校に、本学が個別に出向くもの
- ③ **高校の進学相談会**：単一の高校が主催となり、同時に複数の大学が参加するもの
- ④ **企業の進学相談会**：企業や団体が主催となり、対象が複数の高校の受験志望者で、同時に複数の大学が参加するもの
- ⑤ **大学説明会**：上記1から4の総称として

このうち、主催者が高校であるケースは、②の高校訪問および③の高校の進学相談会であるが、特定の高

校で実施される進学相談会を、企業が取り仕切っているケースも存在する。

①は大学が独自に開催する受験志望者に対する学部説明会であり、毎年6月または7月に、高校および予備校の進路指導者を対象に入試制度の概要説明を中心に実施するものと、旭川と函館の2会場で、受験志望者を対象に実施するものである。本学での高校および予備校進路指導者を対象とした学部説明会は、平成18年までは保健医療学部のみでこの説明会を実施してきたが、平成19年からは医学部が加わり、併催している。受験志望者を対象とした学部説明会は、医学部は平成16年から実施している。当初、旭川地区は旭川東高校、函館地区は函館ラ・サール高校で学部説明会を開催してきたが、平成18年度からはホテルで学部説明会を開催している。平成22年度から保健医療学部も同時に開催した。そこでは模擬講義、入試制度の説明、個別対応などが行われる。

②の高校訪問では、本学に興味を持っている学生を対象に、時間を区切ってプレゼンテーション後、質疑応答を行う。多くの場合、高校1年生から3年生までを同時に対応することになる。学年によって、医療職に対する理解度や、受験に対するイメージの具体性に差があるため、本学の全体像や各学科の内容を説明することが中心となり、入試制度などは簡単に触れる程度になることが多い。

③の高校の進学相談会では、体育館などで各大学にブースが与えられ、そこに本学に興味を持つ学生が来訪して説明を受け、個別に質疑を行う方式がほとんどである。高校の進学相談会は、学年毎に時間を区切って行われるケースが多いため、学年毎に対応を変えることが可能である。また、高校生の直接的な反応が得られるため、質疑も活発になる傾向がある。高校内であることから友人同士でブースに来る学生が多く、同時に多数の学生に対応することが多くなる。また学生たちは、複数の大学が並ぶ中で本学のブースを選んでくる積極性を持っており、具体的な質問を持ってくる

ケースが多く見られる。

④の企業の進学相談会は、高校の進学相談会と同様に、広い会場に各大学がブースを設けて行われるが、時間を区切って別室でプレゼンテーションを行う場合もある。企業や予備校など各種団体が主体となって開催される場合は多くがこの形式となる。本学が参加している、北海道進学コンソーシアム（道内の国公立大学により道内大学への進学者確保のために設立された団体）主催の進学相談会もこれに含まれる。受験志望者は高校の進学相談会と同様に具体的な質問をする場合が多いが、当然ながら過年度生の参加も多く見られる。友達同士で来ることもあるが、むしろ保護者と一緒にブースに来ることが多い。

3 大学説明会の参加状況

過去5年間の大学説明会の参加回数、および同期間に企業の進学相談会などに参加要請があったものの、資料提供のみの参加となった件数を表1に示す(入学試験委員会学内資料)。入学者選抜企画研究部門が設立されたのは平成20年10月であるが、その年度を境に参加回数が大きく伸びていることが理解できる。特に高校訪問が顕著に増加している。資料提供のみの件数も増加しており、この各種大学説明会に参加の要望は今後もさらに増加することが見込まれる。

参加した大学説明会の件数が増加するに従い、対象となった受験志望者の数も増加している。過去3年間における、参加者概数を表2に示す(入学試験委員会学内資料)。人数の把握は、高校訪問および学部説明会では容易であるが、高校の進学相談会や、企業の進学相談会では、参加者数が多いため正確な参加人数の把握が困難であり、概数から算出したものである。

本学が独自に、函館と旭川の2地区で開催する学部説明会への参加人数を表3に示す。高校および予備校進路指導者を対象とした学部説明会は、保健医療学部の推薦入試が始まる平成21年から大きく参加人数が増加している。

受験志望者を迎えての学部説明会は、第1回の函

表1：過去5年間に本学教職員が参加した各種大学説明会の参加状況

	学部説明会	高校訪問	高校の進学相談会	企業の進学相談会	計	資料提供のみ
平成18年度	3	3	4	9	19	5
平成19年度	3	4	3	12	22	6
平成20年度	3	8	11	9	31	9
平成21年度	3	12	15	6	36	12
平成22年度(予定)	3	10	13	11	37	17

入試広報としての大学説明会の現状

館地区の参加人数が非常に多く、その後一時減少した。両地区の参加人数は開催する地区ごとに見ると増減はあるが、合算するとここ5年間は増加傾向にある。特に平成20年の旭川地区、平成21年の函館地区では参加人数が大きく増加している。この原因は明確ではないが、医学部の特別推薦入試が始まったのが平成20年度入試であり、特別推薦に対する関心が高まったことも一因ではないかと推察する。また前述の通り、平成22年度から保健医療学部も同時に開催したが、医学部と同程度の学生が参加している。今後の動向に注意しつつ、さらなる工夫と展開が必要であろう。

4 大学説明会での主な質疑

さまざまな場所と形式で行われる大学説明会での、受験志望者から受ける質問には、いくつかのパターンが見られるので、大きく、①本学の全体像に関して、②入試に関して、③学生生活に関して、④卒後の進路に関して、⑤その他、に分類した。

①の「本学の全体像に関して」は、「他大学と比較しての本学の特徴は何か」を質問してくる受験生が非常に多い。これは受験志望者が本学を選択するためのキーポイントを求めていると推察される。「札幌大で行われている最先端の研究とは」という質問も、実はこの「他大学と比較しての本学の特徴は何か」という質問と同根と考えられる。また、保健医療学部志望者

からは、専門学校と大学との違いを問われることがある。

②の「入試に関して」の質問であるが、医学部特別推薦入試、保健医療学部推薦入試に関して多くの質問を受ける。特に平成22年度入試から始まった保健医療学部推薦入試は、徐々に周知されているようであるが、多くの大学説明会で、こちらから積極的に説明をしている。

推薦入試に関してしばしば受ける質問の中に、高校によっては合格の枠や、成績の重み付けに差を設けているのではないかとというものがある。特に高校から提出される評定平均の扱いについて誤解が散見されるので注意が必要である。

医学部志望者からは高校での理科の履修状況や受験科目に関する質問を受ける。具体的には高校で生物の授業がない場合に不利になるか、入学後に苦労するか、受験科目によって有利不利があるか、というものが多。言うまでもなく、高校では物理、化学、生物の全科目をしっかりと学んで入学してくることが望ましいが、現在の高校のカリキュラムでは必ずしもそれが可能ではない。少なくとも受験に関しては問題がないと伝える必要がある。

③の「学生生活に関して」では、学費、奨学金、寮に関する質問が多いが、これらは本学が毎年発刊している大学案内冊子である『LEAP』の「Q&A」のページに説明が記載されている。部活動が盛んであること、アルバイトも経済的な理由以外に社会勉強として行っている学生もいることなどを説明すると、受験志望者たちの反応がよい。ただし、本学はどの学部学科でも入学後も必須科目が多く、また実習などで多くの時間を要すること、本学を卒業しても医療職につくためには国家試験に合格しなくてはならないので、あくまで

表2：本学が参加した各種大学説明会の参加者概数

年度	人数
平成20年度	約1096人
平成21年度	約1378人
平成22年度(予定)	約1734人

表3：学部説明会への参加人数の推移。本学：高校および予備校の進路指導者を対象に本学に迎えて実施するもの。平成18年までは保健医療学部のみ。19年以降は医学部も同日開催。旭川地区と函館地区は、平成21年度までは医学部のみ。22年度は保健医療学部も同時に開催。(医：医学部、保：保健医療学部)

	本学	函館地区	旭川地区	函館・旭川計
平成16年	保 14人	62人	27人	89人
平成17年	保 20人	39人	22人	61人
平成18年	保 28人	26人	26人	52人
平成19年	医・保 23人	28人	25人	53人
平成20年	医・保 31人	27人	46人	73人
平成21年	医・保 57人	41人	33人	74人
平成22年	医・保 54人	医42人, 保36人	医41人, 保43人	医83人, 保79人

も勉強が第一であることも伝える必要がある。

④の「進路に関して」では、医学部志望者と保健医療学部志望者とは若干傾向が異なる。

医学部志望者で入学前から特定の診療科を希望していることは問題ではないが、あまりにそれにこだわりを持ち、他のものに興味はないという受験志望者がまれにいる。少なくとも一通り全ての学科目を学ばなければ医師にはなれないことを伝える必要がある。またテレビドラマの影響は大きく、臨床や基礎に関わらずドラマに登場する分野に華々しい印象を抱いている学生もいる。こういった受験志望者に否定的な情報を与えることは問題であるが、同時に広い学びの必要性と、いかなる分野においても、医療には地道さが求められることを多少なりとも伝えるべきであろう。

本学は北海道の地域医療に貢献しているが、受験志望者、特に医学部特別推薦入試を志望するものが、地

域医療というものに対して抱いているイメージには偏りがある。無医村だった場所でたった一人、村人の健康を守る、というものである。これもまたテレビドラマなどの影響が大きいと考えられる。特別推薦入試を説明する際に、丁寧な説明が必要である。

保健医療学部志望者からは、就職や資格取得に関する質問が多く寄せられる。看護師と保健師の違いと資格について、また助産師志望の受験生たちにも丁寧な説明が必要である。

大学院での研究に関する質問は、将来的な進路に対する興味と言うよりは、実際には「札医大で行われている最先端の研究とは」という質問と同様で、札医大の特徴を把握することで本学を選択するためのキーワードを求めていると推察される。

⑤の「その他」であるが、これは広範囲にわたっている。『LEAP』の記事を見て、入学後どのような科

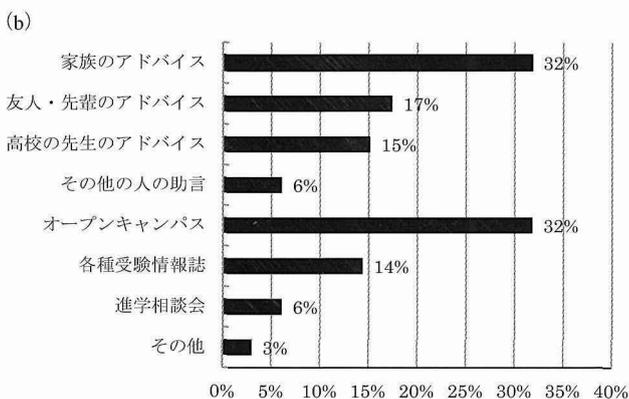
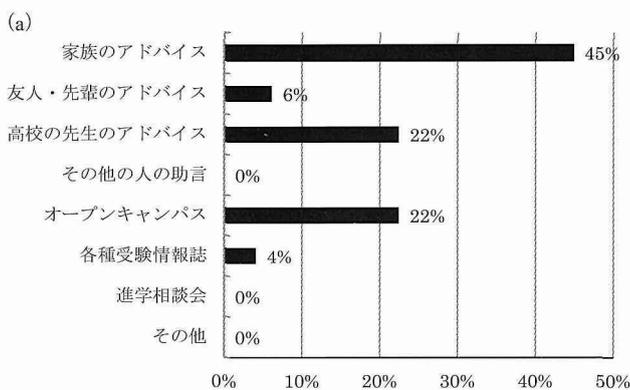


図1：平成22年度保健医療学部入試時におけるアンケート調査

「志望校を決定するにあたり、何が一番参考になりましたか」という問への回答。

(a)推薦入試：平成21年11月28日実施(回答者49名、回収率100%)

(b)前期日程入試：平成22年2月25日に実施(回答者127名、回収率96.2%)

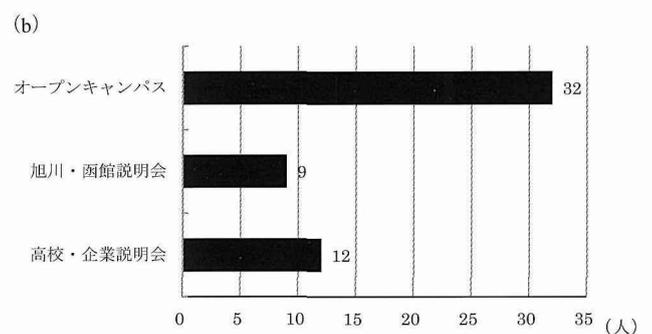
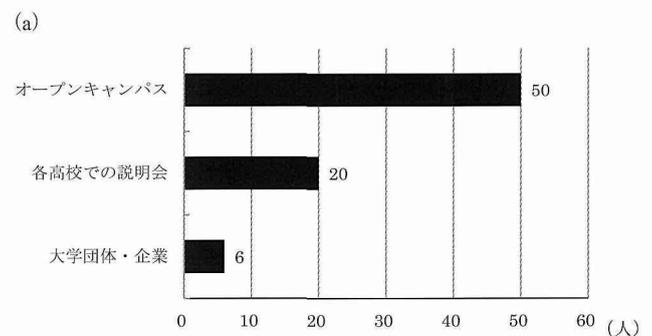


図2：入学後のアンケート調査(保健医療学部：平成22年4月3日実施、医学部：平成22年4月2日実施)

「参加した説明会を教えてください」という問いへの回答(複数回答可)(a)保健医療学部(回答者90名：回収率98.9%)、(b)医学部(回答者110名：回収率100%)

目を学ぶのかという質問を受けるが、これはかなり『LEAP』を読み込んでいるために出てくる質問である。大学説明会に参加する教職員が大学での教育内容に精通している必要があるが、同時に『LEAP』の記述も受験志望者にわかりやすい内容とする工夫が求められる。

5 大学説明会の効果について

大学説明会は繰り返し行う必要があり、人的、予算的資源を必要とする。しかしながら、その効果は一朝一夕で反映されるものではない。

図1に平成22年度保健医療学部入試時に行ったアンケート結果を、図2に医学部および保健医療学部の新入生ガイダンス時に行った、平成22年度オープンキャンパス及び各種説明会に関するアンケート調査の結果を示す。図1から残念ながら、保健医療学部推薦入試、前期日程入試のいずれでも、本学を受験する際に一番参考になったものとして、進学相談会を挙げた受験生は多くはないことがわかる。しかし、入学後に行ったアンケート調査では、比較的多くの保健医療学部新入生が各種説明会に参加している(図2(a))。医学部では、入試時のアンケートにおいて「本学を受験する際に一番参考になったもの」を問う設問は設けていないが、新入生ガイダンスでのアンケート結果は保健医療学部と同様に、比較的多くの者が各種説明会に参加している(図2(b))。

この結果は入試時に行ったアンケートの設問が「本学受験に一番参考になったもの」という限定されたものであるためと考えられる。大学説明会によって興味をひかれたが、結果としてオープンキャンパスや進学指導の先生、家族のアドバイスなどで最終的に本学受験を決めた場合などは、このアンケートからは見えてこない。図2の結果から、大学説明会が入試広報として一定の効果を果たしているものと思われる。

現代の日本は少子化が進み、優秀で適性のある学生の確保は大学にとって急務である。道内においても18歳未満の人口は減少しているものの、大学進学率は上昇しており、医療職へ進むことを希望する学生の数も上昇している²⁾。こういった学生に対して積極的に広報活動する必要性は論を待たない。大学説明会は受験志望者に直接接して、疑問点を解消し不安を取り除くためには効果的であろう。またオープンキャンパスなどの参加者は、すでに本学に強い興味を示している高校生が参加する。これに対して、これまで医療職にはっきりとした意識を持っていない、あるいは医療職に興味があっても、本学進学を考えていなかった潜在的な学生の掘り起こしには、高校生と直接に接する大学説明会は重要であろう。

6 今後の課題

最後に、今後大学説明会を継続していくために、議論すべき課題を三点挙げる。

まず一点目として、どの大学説明会に参加すべきか、という問題である。

道内の多くの高校から高校訪問の要請や進学相談会への参加要請があるが、全ての要請に対応することは不可能である。現在までは、過去数年間における本学受験実績を踏まえて、スタッフを送ることができるかどうかの人的、予算的事情も鑑みた上で対応を決定している。平成13年度から医学部で高校訪問が始まった時点から、「どこまで対応するか」の議論は行われているようであるが、当初は30校程度が妥当な数字であろうと考えられた。しかしながら、大学説明会に、これまで本学進学に興味をもっていなかった受験生の掘り起こしという目的を加えるとすれば、さらに積極的に参加すべきという考えも成り立つ。費用対効果もしっかり考える必要がある。

二点目として、大学説明会に参加する教職員は、自身の所属する学部学科以外のことも質問されるケースがあるが、これにどう対応するかである。

すべての大学説明会に、入学者選抜企画研究部門および入試室のスタッフのみで対応することは困難であり、多くの大学説明会に医学部および保健医療学部の教員が参加している。それぞれの教員が自身の経験をもとに本学を紹介することは重要であり、受験志望者にも好評であるが、最低限共通の情報を提供できることが必要と考えられる。このためには共通概念に基づいた資料づくりを検討しなくてはならない。現在、2学部4学科で共通に使える資料を検討中である。これをもとに、大学説明会に参加した教職員が自身の提供する情報とあわせて本学の特徴を紹介できるよう考えている。

課題の三点目として、高校や受験志望者からのフィードバックをいかに得るかという問題である。これは、本学が提供する情報を改善し、大学説明会を効果的なものにするためには必須である。学部説明会でのアンケート調査は、翌年以降の学部説明会改善のための資料として役立つ。しかし、進学相談会では多くの大学と学生が参加するため、与えられた時間内に本学を紹介することにとどまることが多い。このため、入試改善の具体的情報が得にくいのが現状である。高校訪問では参加した学生、あるいは高校や予備校の進路指導者に対して、後日アンケート調査を行ってもらうよう、依頼する方式が現実的であろう。また高校訪問では終了後に進路指導者とディスカッションを行う機会が比較的にあるので、これを積極的に利用すれば多

くの情報を得ることが可能になるであろう。

文 献

- 1 札幌医科大学自己点検評価委員会、平成 15 (2003)
札幌医科大学自己点検・評価報告書
- 2 河合塾、第 2 回大学入試・広報セミナー 北海道
地区の模試動向資料